後撰百人一首評釋（承前）

禾の舍あるじ

源忠季

葉かへせぬ松のひまよりもる月は君か千とせの影にそありける

松もかはらず、月もかはらず、月にも影あり、松にも陰あり、これがやかて君のみかげなり、數ならぬ我らまで、このみかげの下に豐にすめる嬉れしさよとなり、松にかはらぬをいひて、陰をはぶき、月に影をいひて、かはらぬをはぶきたり。互文の法なり、はた、下の句の千とせの詞、初句をうけとめたる、大によし、

源兼泰

うしとみし人よりも猶つれなきはわすらるゝ身の命なりけり

つれなきは、俗にいふ鐵面にて、うき目を見せたる人の鐵面なるよりは、人にわすられて、生きてゐるかひもなしとて、死なれもせず、猶ながらふる命は、一段つれなしとなり、これは、男女のみちにもよらず、貴賤の位にも論なく、世にかゝるもの、幾人といふ數しらずあることなり、世の中をあやつりわざのやうにして、いつもよく人の上に位をしめさて君の明をくらまし、國の勢をそこなひ、よもやもよりにくまれ、そしられ、退けられても、腹かきゝりて死なん勇氣もなく、俗にいふ冷飯くひても婆婆にをりたしといふものゝつれなきは、げにも身の命なれば、かゝる人の懷をのべたるものなるべし、今日は尤鐵面の人の目をつくばかりの世の中なれば、このやうの述懷は、れの〳〵あるべけれども、さりともきこえぬは、鐵面も今

ははや一段こえたりといふべし、豈浩歎の至りならずや、

藤原時房

きゝすなくかた野のみのゝ花すゝきかりそめにくる人なまねきそ

交野のみのは、河内の名所なり、かりそめとは、さして心なきをいふなり、かりに狩をかけたり、この野には、雉子の鳴きてゐるほとに、何の用意もなく、狩せんとてくる人を、招くなよと、花すゝぎにいふなり、世の中には、私の慾の爲めに、人の手前をもれもはず、あらぬわざするもの多かり、牧民の任に當れる人などは、朝夕この歌を三復すべし、

前大納言良敎

諸共にみしをかたみの月たにも朽なは袖に影やたえなん

諸共にみし月を、かたみとれもひて、今もながむれども、その月をみるにつけて、涙のこぼるゝに、袖も朽なば、かたみの月の影も、後には、たえはてやせん、と歎きたるなり、あはれに情ふかし、月だにも、といひては、意通せず月にだにとあるべきなり、さらでは、月の朽つることゝなりぬるなり、こゝは、月をみるにだにも、涙のわたて、袖の朽つるよしなり、親子、夫婦、兄弟、朋友、死別の後は、必この悲境はあることなり、

女御徽子女王

袖にさへ秋の夕はゝられけりきえし淺芽か露をかけつゝ

初の句は、秋の夕のかなしきはの意なり、淺芽は、ちはなといふ草のこと、あまり深

くは去げらぬ故、淺とはいふなり、秋の夕くれに、淺芽が原をすぎゆけば、露の袖にかゝりて、きえゆくにつきて、秋の夕のかなしさは、去られたりとなり、意餘りありて、詞たらぬ歌なり、

前右兵衛督爲敎

くもりなき影もかはらす昔みしまゝの入江の秋の夜の月

眞間の入江ハ、下總の名所なり、影ものもは、まゝの入江に對へてなりし、月影も、入江もかはらず、むかしまゝなりといふを、眞間の入江にかけしなり、影にかはらずといひ、入江にみしまゝをかけたる、自然の照應にて、一氣呵成の作なり、

紀淑望

もみちせぬときはの山はふく風の音にや秋をきゝわたるらん

常盤山は、山城の名所なり、常盤樹をいひかけたり、ときは、とこ去なへの意なり、はもじは、語助なり、よはのは、と仝し、夜半とかくは、假名なり、常はの山にすめる人は、と、心うべし、一首の意は明かなり、

三條院女藏人左近

君はかく忘貝こそ拾ひけれうらなきものは我か心かな

君こそは、浦の忘貝のごとく、我を忘れ給へども、我は、忘貝をひろふべき浦のなきがごとく、心に裏なく、君をたもふとなり、浦に裏をかけゝるなり、貞女の心、かくのごとくなるべし、この歌のこそけれにて、その用法をさとるべし、反對の意をつよ

くいふ時に用ふる詞なり、故にけれの下には、ぞもといふ詞を加へて、義理をとることなり、

辨内侍

れもふ事いはで心のうちにのみつもる月日をしる人のなき

れもふことのつもるを、月日のつもるにかけたるなり、おもふ事をいはで、月日を重ぬるを、去る人のなきをいかにせんとなり、下の句、切れぬ詞にてとめたる、餘情深し、むかしの淑女の心はへ、おもひ見るべし、かゝるならはしなれば、往々鬱病にかゝるものもありしなり、今の女には、鬱病にかゝるもの、一人もなきは、女德のおとろへて、皆轉蓬者となりはつればなり、故に今は囂病などをやむもの、比々皆去かり、これらの歌を煎じてのませたきものを、おもへども、今はゝや千服々するとも、きゝめなし、とかある人の、いひて慷慨一番す、

源道濟

姫小松おはかる野へに子日してこゝろに千代をまかせつるかな

正月の子の日に、小松をひきてあそべば、おのが心のまゝに、千代をることかなとなり、こゝろまかせに、千代契るかなといふべきを、にいひたる、味ふべし、おはかるは、れはくあるの約なり、

齋宮甲斐

わかれゆく都のかたの戀しきにいさむすひみむわすれ井の水

むすぶは、掬の意なり、いざは、俗にいふヤレといふ心なり、忘井は、伊勢の名所なり、都の方の戀しきにたへざれば、やれ忘井の水を手に掬ひて、試みん、忘るゝよしもありなんかとなり、わすれられさるを、忘れんといふ、情の切なるなり、

後山本前左大臣

恨みても戀ひてもへぬる月日かな忍ふはかりをなくさめにして

人を戀ひ忍ぶばかりを、なぐさめにして、その人のつれなきを恨みつ戀ひつ、月日をへぬることかなとなり、

神祇伯顯仲

風はやみとしまか崎を漕きゆけは夕波千鳥たちねなくなり

はやみは、はやくあるゆゑに、といふ心なり、この詞、下の夕波云々にかゝる、波もたつものなれば、夕波千鳥とあはせていへるなり、としまが崎は、つの國の名所なり、實景の歌なり、

從三位頼政

山城の水野の里に妹をたきていくたひよとの舟よはふらん

妹は、妻をいふ、よどのわたし舟をよびて、水野へかよふなり、一誦すれば、妻愛の情、油然として起るなり、鬼かみの心をも和らぐるは、歌なりとかいへる、げにもとれもはる、

前參議親隆

松嶋やを云まか崎の夕かすミたなひきわたせ海人のたく縄

松嶋をじま皆陸のくの名所なり、たく縄は、たくとて、楮の皮もて、つくる縄をいふなり、古事記に、栲縄の千尋の縄うち延へて釣する海人、とみえて、海人の縄は、いとながかれば、長きことにいへるは、常なり、この縄のごとく、今一段長くひきわたせといふなり、聲調爽朗、牽力雅健、所がらといひ、歌がらといひ、えもいはずめでたし、

伏見院

色かはる心の秋のつたかつらうらみをかけて露そこぼるゝ

つたかづらの、秋にいたりて、うらがへり、色がはりするごとく、人の心にあきの生するまゝに、いろにいでゝみゆるのみならず、うらみをさへかけられてけるが、かなしさに、涙の露ぞこぼるゝとよませ給ひしなり、かけては、かけられてなり、この方よりかくるやうに解くは、あし、人に云られずといふを、人云らずといふに仝じ、ましてつたかづらを、人の方にかけて、よませ給ひしをや、これらは正喩湊融の体ともいふべしや、

二條院三河内侍

秋の野の花わけ衣みやこまて色はやつさし見ん人の爲め

やつすとは、その色すがたを、變ずることなり、化の字の意なり、貴き人の、賤しきすがたをするも、貧しき人の、富める人のすがたするも、皆やつすなり、花分衣のそまりし色を、やつさで見せんといふ、やさしき心ばへにこそ、

夢窓國師

わすれては世をすてかほにれもふかなのかれすとても數ならぬ身を

夢窓國師は、一世の法燈なり、その人の顯晦は、佛法の盛衰に關するなり、去かるに、この歌をみれば、その謙讓かくのごとし、さて後の人の遁世の歌や、辞世の詞をみれば、われこそ世の運命にかゝれるものゝやうにいひなせる、かたはらいたきわざなり、辞世なぞに、放言するは、決してその心にえたる所あるものゝわざにあらず、數ならぬ身ゆゑ、大言もて人をれぞすなり、この歌、よく〳〵覺えれきて、愼むべきなり、國師すら、時ありてわすれ給へるぞや、まして國師ならぬものは、常に我れの心の色に見ゆるぞかし、

土御門内大臣

逢ひみ去はむかしかたりのうつゝにてその兼ことを夢になせとや

あひみしは、むかしかたりとなりしかども、あひしことは、現にありたることにて、この時、兼て契りし言を、今は夢になせとやいふ、人の心の底干去られぬとなり、人情澆季の世は、皆かくのごとし、うつゝのことを、皆夢にしはたすなり、

藤原伊光

紅のやしほの岡のもみち葉をいかにそめよと猶去くるらん

やしほとハ、物を一たびそむるを、一入といひ、いくたびとなく染むるを、千入、八入といふなり、八入の岡は、山城の名所なり、これにかけたるなり、天の人に大任を負

はする、必かくやうの感慨はあるものなり、喜びてうくべきなり、いとふべからず、是人の逆境にある時の心法なり、

前大納言爲宣

かよひちのなきにつけてそ忍ぶ山つらき心のねくは見えける

忍ぶ山は、みちのくの名所なり、かよひぢ、ねく、皆忍山に映帶せしむ、人富める時は、人情はみえぬものなり、一たび貧賤にれちて、かよふ路もなく、告ぐる所もなくなり、忍ぶ〳〵、人の許に乞ひすがるに至りて、初て人情の厚薄はみゆるなり、古人も、一盛一衰人情を見るといへり、これをいふなり、つらき心は、氣のつよき心をいふなり、

高階宗顯

くもるともよしやなみたのますかゝみわか面影はみてもかひなし

よしやは、よしやいとはしの意なり、涙の增すを、眞澄鏡にかけしなり、面影はのは、もしは、れもふ人の面影にむかへてなり、れもふ人の面影をみてこそは、かひもあれ、わが面影はといふなり、

藤原俊蔭

花のちることやわびしき春霞たつたの山のうくひすの聲

花のちることやわびしきとて、なくにやとなり、立田山は、大和の名所なり、心なき鶯に、ことよせて、花のちるををしむなり、わびしきは、物をふそくにれもふやうな

る心と解するは、失意をわびしきともよみ、貧居をわびずまひともよめば、あたれるやうなり、

藤原實清朝臣

くれて行く年のすかたはみえねとも身につもりてそあらはれにける

年のわが身につもりて、老の姿となりぬるによりて、年の姿はあらはるとなり、

安法法師

夏衣またひとへなるうたゝねに心してふけあきのはつ風

この歌、法師の身にして、よきなり、貧僧は秋立つといふとも、俄にひとへよりあはせにうつられもせぬなり、さやうにみざれば、この歌、何の味はひもなきなり、

藤原實光朝臣

月影のさすにまかせて行舟はあかしのうらやとまりなるらん

月影の面白くさすまゝに、こぎゆく舟は、夜をあかすといふあかしのうらや、とまりにてあらんとなり、赤壁の賦に似たり、

小野良材

我戀はみやまかくれの艸なれや去けりまされと知る人のなき

みやまのみは、美稱なり、深山の意にあたれり、なれやは、なればにやの意なり、去る人のなきは、こやまをうけ、去げりは、艸をうく、只戀のみにあらず、深慮のある人は、皆かくのごとし、

從二位業子

物れもふ水上よりや涙川袖になかるゝものと成けん

涙川の下にの出てゝといふ詞をかへてみるべし、あまりに涙のいづるにつけて、れのれとゝがめたる歌なり、

隨蒐錄

去歲乙酉七月、小庭李樹之下產靈芝一莖、至本年五月復生數莖、每莖一葉乃至三葉、層々擁樹根而挺生、狀頗奇矣、諸友見以爲異、使予索詩文於大方、予素乏詞藻、不解韻事者、然諸友之慫慂有不可默止者、乃隨得蒐錄、欲永不忘其好意也、

丙申九月　　芝庭　片嶺忠識

片嶺氏園中生玉來徵詩於四方因賦寄　　黑本稼堂

縫桃樹下紫芝叢、累々子孫終不窮、曾聽將堅爲脆拙、今看化腐作新巧、九重禁裏詞仙簇、五老峰前採訪通、靈知朽餘夜光玉、賁然照到小園中、

友人片嶺恕卿庭生靈芝恕卿愛重不措乃賦之以贈　　落合東郭

玉色金柯映蘚紋、清幽庭砌氣絪縕、高歌唱去商山曲、長鑱帶來玄圃雲、邱壑風光仍此地、神仙眷屬是夫君、移根今日堪爲侶、空谷芳蘭吐異芬、